

国内の取組事例

①海外で活動するプログラム

- Case1: アジア夢カレッジ [亜細亜大学]
- Case2: グローバルアウトリーチ(GO)プログラム [桜美林大学]
- Case3: ギャップイヤー・プログラム [名古屋商科大学]
- Case4: Grobal Collaborative University Education GLUE
[立命館アジア太平洋大学]
- Case5: 立命館大学・アメリカン大学学部共同学位プログラム DUDP
[立命館大学]
- Case6: BIE プログラム [龍谷大学]

②国内で活動するプログラム

- Case7: リアルワークプロジェクト [京都造形芸術大学]
- Case8: 長期社会協働インターンシップ [高知大学]
- Case9: 長期インターンシップ [湘北短期大学]

③国内と海外の両方で活動するプログラム

- Case10: スリランカ「Exploring Development」プログラム [福岡女子大学]

④活動場所を自分で選べるプログラム

- Case11: ギャップイヤー入試 [国際教養大学]
- Case12: FLY Program [東京大学]
- Case13: インターンシップ科目 [明治学院大学]

①海外で活動するプログラム

Case 1

『アジア夢カレッジ』キャリア開発中国プログラム (全学部対象*ホスピタリティ・マネジメント学科を除く)

亜細亜大学

Semester制・1,442人 (対象学生)

取り組み概要

【事例タイプ】長期留学＋就業体験インターンシップ (国外)
【実施主体】経営・経済・法・国際関係の各学部
【対象】2年生 (選抜者)
【時期・期間】**2年生8月下旬から翌年1月下旬までの5ヶ月間(150日間)**
【行き先】中国・大連
【参加人数】最大40名定員 (10名～25名程度が例年参加)
【単位認定】有 18単位を卒業要件に換算し4年間での卒業が可能。
【プログラム構成】出発前フィールドワーク＋基礎ゼミ＋中国語 (キャリアデザイン等含む) 事前学習⇒留学、120日間⇒インターンシップ30日間⇒帰国後・応用ゼミ、キャリアデザイン、成果指導ゼミ、中国語コミュニケーション (キャリアプラン、国内インターン、就職フォローアップ等)

背景・経緯

鯉淵信一学長 (当時) が発案。亜細亜大学の建学精神である「自助協力」に基づき、人的交流が根底にある国際教育交流の機会をつくれぬか検討し具体化。当時大連外国語学院と協定を締結していたが、具体的なプログラムを持たなかったことも背景にあり、起点として大連を定める。亜細亜大学の独自性を醸すべく推進。**現地では中国人ルームメイトと1対1での共同生活を送る。**また、**単に留学プログラムを用意するだけでなく、インターンシップを組み込んだプログラムとし、他大学との差別化を鮮明にしている。**実学に注力する亜細亜大学としてもマッチする体験型学習として、確実な成果を積み上げてきている。

プログラム内容 (目的・教育内容・体制など)

- 【目的】 国内とは異なる環境、文化、価値観や倫理のなかで、同世代と触れあい、かつ働くことの意味を実感することで、学生を成長させ、大学を卒業した後の社会人としての深さや幅に通じる機会に。
- 【事前学習】 **所属学部の授業と「中国」、2つの専門性の獲得を念頭に、**フィールドワーク＋基礎ゼミ＋中国語 (キャリアデザイン等含む) の事前学習を行う。
- 【派遣期間中】 2年生の8月下旬から渡中。150日間の学習と体験活動プログラム。
①大連外国語大学。中国語、中国の仕事と生活、知の探検 (中国の伝統と文化) を学び、**滞在先には中国人パートナーがルームメイトとなり、1対1で生活をする。**120日間。
②語学力の向上、現地企業代表者等の講演の聴講等を通じ、単なる知識にとどまらないビジネスマインドの習得を経て、インターンシップに臨み、現場で行動力を養う。
③大連市に拠点を持つ協賛企業等での就業体験において、中国と関わり働く意欲、目的意識、社会人としての基本能力を培う。30日間の実習。企業や公的機関で働く中国人社員と日本人社員の勤労観、生活感、働く姿勢などを体験、学習する。
④費用は48万円 (平成25年度実績)。
- 【事後学習】 応用ゼミ、キャリアデザイン、成果指導ゼミ、中国語コミュニケーション (キャリアプラン、国内インターンシップ、就職支援等) また中国語の能力がさらに向上するようにフォローアップ授業、検定試験受験等を課す。それにより、学業と就職活動にも資するということを実感させる。
- 【支援体制】 国際交流センターの中に担当職員チームがあり、年度単位での総括と研修を経て、次年度以降のブラッシュアップに対応できる人間の育成を両立する。**現地専属スタッフの常駐。**参加学生2名程度にスカラシップとしての派遣奨学金を授与する支援策も有する。
- 【選抜方法】 **公募推薦入試や一般入試等の合格者に『アジア夢カレッジ受講者選考』案内を送付、希望者に対して書類審査及び面接による選考し選抜合格者が受講確定者となる。**希望者はその動機や目的、通常の授業への取り組み姿勢、中国語のレベル等を鑑み選考されていく。一年次に配置されている必修科目等の履修状況、また学習・生活態度等もゼミ担当教員が把握し、中国派遣留学プログラム参加の可否を判断する。また、一年次での中国検定3級取得は必須。

【検証】

授業に関しては現地での成績、インターンシップについては、企業担当者からの評価と及び学生への考察により留学成果を検証する。

【効果】

参加学生の就職率は100%であり、その成果は確かなものである。多くの学生が、日本にしかいなかった時期と比べ、より積極的な意識、行動の変化をしている。**自らにとって常に不便な環境こそが自己を成長させるという心構えの会得にも、大連で生活した時間が生きている。自らが切り拓いていくのだという主体性を持った当事者意識に通じている。**

①留学+インターン 150日間 という設計

②滞在先での、中国人ルームメイトとの1対1の生活

③中国大連留学の実績を学業と就職活動に活かしていくフォローアップ

この「アジア夢カレッジ」においては、**語学力の習得のみでは終わらないことが最大の特徴**である。

現地のプログラムをこなしていくなかで、参加者と現地の中国人同士のふれあいや交流の中から、己の成長と同時にその意味が実感できるようになっている。

留学の成果をさらにブラッシュアップすべく、中国語のコミュニケーション能力が向上するようなフォローアップ授業、検定試験受験等を課す。さらに帰国後の応用ゼミなどを通じて、キャリアデザインを自ら描けるように指導する。結果的に学業と就職活動において、効果を実感させる。

- ・プログラム開始直後は、現地学生との生活水準の違い等に配慮する必要があったが、現在現地学生とのコミュニケーション不足への対応が必要になっている。
- ・参加者が、一大イベントとして認識し、真剣に準備をし、取り組むため、帰国後に、燃え尽き症候群のような学生が出ることもある。
- ・参加検討者の対中感情の影響（保護者等を含む）で、人数が減少する場合がある。
- ・中国語のみならず、英語も学びたい欲求のある学生に対して、対応できない面がある。
- ・意欲や覚悟が必要な取組のため、必修化はしないが、効果ある取り組みであることを認知し、期待する学生を増やすこと。
- ・比較的に実学に注力する面のある大学であり、本プログラムの実践としての効果や、その影響について、学生が帰国後、研究対象として探究したいと考えるケースは少ない。

①「アジア夢カレッジ」の参加者の実感、満足感、その体験と学びが確かなものであり続けるべく、プログラム内容の改善改革を続ける。

②150日間プログラム後に、アジアにおける英語圏ないし華僑圏での1カ月程度のインターンシップ等の機会等を付加すべく検討中である。それにより、当初の狙いである、英語習得と中国語習得、さらに違った文化体験をもたらすことができ、将来的に輩出する学生の強みがさらに増すことになる。

キャリア形成を意識した4年間のプログラム

中国について学び、留学やインターンシップを経験するなかで、自己のテーマを発見し、帰国後はゼミナールでの研究に取り組みます。卒業後の進路を意識しながら学べるよう、キャリア教育を早期から実施しているのも特長です。

	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期
学部授業								
専門分野	フィールドワーク	基礎ゼミⅠ	基礎ゼミⅡ	AUCP Asia University China Program 大連留学 & インターンシップ 大連外国語大学留学 ●中国語 ●中国の仕事と生活 ●知の探検 (中国の伝統と文化) 自己テーマ研究、調査 インターンシップ	応用ゼミⅠ	応用ゼミⅡ	成果指導ゼミⅠ	成果指導ゼミⅡ
中国理解	中国キャリア開発入門Ⅰ 中国研究Ⅰ	中国キャリア開発入門Ⅱ	現代アジアの人と社会 現代アジアと中国		現代アジアとキャリアデザイン	中国語コミュニケーション		
キャリアサポート	キャリアデザインⅠⅡⅢ	適職入門ⅠⅡⅢ	留学準備セミナーⅠⅡⅢ		キャリアプランⅠⅡⅢ	国内インターンシップ	就職フォローアップ	
中国語								

POINT 1 所属学部の授業と「中国」、2つの専門性を修得

参加学生は、所属する学部の授業と並行して「アジア夢カレッジ」独自の授業も受講します。「学部の専門性」と「アジア・中国に関する専門性」の両方を身につけることができるカリキュラムが特長です。中国に留学し、知識を深めるだけでなく、ビジネスの現場で活躍できる人材を育成するのが「夢カレ」なのです。



※経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科、短期大学部はこのプログラムを受講することはできません。

POINT 2 産学連携による徹底サポート

中国ビジネスにおけるリーダーの育成を求める企業と、長年にわたる交流で中国と太いパイプを持つ亜細亜大学。「アジア夢カレッジ」のユニークなプログラムは両者が連携することで実現しています。協賛企業からは、キャリア教育の共同開発、講師の派遣、インターンシップの受け入れなど、さまざまなサポートを受けています。

■ 中国・大連でのインターンシップ先企業・団体

伊藤忠(大連)有限公司/嘉時泰国際物流(大連)有限公司/紀伊塑料(大連)有限公司/金之石客務服務社/大連愛光汽車部件有限公司/大連意欣国際貿易有限公司/大連外国語大学漢学院/大連光進技術有限公司/大連恒立国際貿易有限公司/大連泰和信息技術有限公司/大連市経済技術開発区管理委員会招商一局/大連慧搜網技術有限公司/大連中国国際旅行社有限公司/大連藤洋鋼材加工有限公司/大連高部企画有限公司/大連博科人材有限公司/大連三島食品有限公司/大連漫歩広告有限公司/東芝大連有限公司/徳勤華永會計士事務所 大連支店/日本興亜損害保険株式会社 大連代表処/日本国駐瀋陽総領事館 在大連出張駐在官事務所/日本法園坂法律事務所大連代表処/日本貿易振興機構(ジェトロ)大連事務所/富士電機大連有限公司/ホームクリニック大連/米克羅彈簧(大連)有限公司/遼寧傑士字律師事務所

POINT 3 AUCPで5か月間の中国留学+インターンシップ

2年次の後期に、中国・大連にある「大連外国語大学」での5か月間の留学(AUCP)を経験。中国人学生のルームメイトと寮生活を送りながら、中国語の授業に取り組みます。また、現地で活躍する日本企業・中国企業の実務家による特別講義や、1か月間のインターンシップなどにより、中国ビジネスの現場を肌で理解することができます。



中国人のルームメイトと生活

留学中に滞在する学生寮は中国人学生と同室。生きた中国語表現に接することができ、24時間「中国語漬け」の生活は会話力を伸ばす最高の環境です。



日中のビジネスを実体験

留学期間のうち1か月は、現地の日本企業または中国企業でインターンシップを行います。製造、サービス、金融など、研修内容はさまざまです。

Case
2

グローバルアウトリーチ (GO)
プログラム

桜美林大学

Semester制 ・ 学生1800名

取り組み概要

【事例タイプ】 1. <LA> 語学学習16週間+文化体験、コミュニティアウトリーチ(奉仕活動、15時間程度など)
2. <BM> 一般英語(8週間)+ビジネス英語(4週間)+就業体験(3-4週間) 計16週間

【実施主体】 リベラルアーツ学群(以下<LA>と記す)・ビジネスマネジメント学群(以下<BM>と記す)

【対象】 1年生、2年生、3年生(LA・BM学群/応資格年次は1年生次のみ、)

【時期・期間】 1年次(LA)or 2年次(BM)秋学期(8-12月)、2年次(LA)3年次(BM) 春学期(2-8月)各約4ヵ月間

【行き先等】 <LA> : アメリカ・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・中国・韓国 <BM> : アメリカ+就業体験

【参加人数】 年間320名程度

【単位認定】 有 LA: 最大20単位(うち8単位を外国語の単位に選択可) BM: 20単位(各指定科目に引当て)

【プログラム構成】 事前学習: LA(12週間)/BM(15週間)⇒留学(16週間)⇒事後学習(2日間15時間程度)

【体制】 国際学生支援課: 留学プログラムの説明、オリエンテーションを提供、危機管理などを実施

* LA・・・リベラルアーツ学群 BM・・・ビジネスマネジメント学群

背景・経緯

<背景>

■『国際社会に貢献できる人を育成する』『学びて人に仕える(学而事人)』という桜美林学園のモットーに基づきプログラムを開発している。

■桜美林大学の学生の素直な気質を考慮し、より彼らの人格を磨く機会をプログラムに入れる目標があった。

<経緯>

■2007年度: リベラルアーツ学群でプログラム開始。(2012年度までに1200名以上の学生が参加済み)

■2010年度: 桜美林学園アメリカ財団発足: 北米に留学する学生のサポートやプログラム拡張の基盤が整う

■2013年度: ビジネスマネジメント学群にグローバルアウトリーチプログラムを開始する

プログラム内容(目的・教育内容・体制など)

【目的】

<学生の養成としてグローバルアウトリーチプログラムの目指すもの>……………※(図1参照)

- 日本文化の再認識(Reflection on Japanese Culture)
- 異文化への関心(Appreciation of Multicultural Societies)
- 地球社会への参加と社会貢献(Contribution to Global Community)
- 責任感の芽生え(Cultivation of Responsibility)
- 主体性を持つ勇氣(Courage to Lead)

<グローバルアウトリーチプログラムの目的>

大学生活の早い時期に留学し、異文化理解や語学力向上を目指す<LA・BM>

1. 大学生活の早い段階で外国語を現地で学ぶことにより、語学の必要性を実感すること。
2. 異文化の中で生活することにより、自らの国や自分自身を理解すること。
3. 異文化社会に飛び込み、どんな状況に置かれても乗り越えられる柔軟性のある人間となること
4. 職業体験(3-4週間)を通して社会貢献と責任感を身に付ける<BM>

【事前学習(1学期間 LA: 12コマ以上/BM: 15コマ)】

■目標設定: <桜美林大学の留学サポートシステム及び留学意義>

- ・準備: 海外旅行保険・ビザ申請の手続からきり始め日本から海外へでる資格を得る体験
- ・意識開発: 留学中のカルチャーショックへの対処法、コミュニケーション法等の講義及び、留学経験者からの体験談(苦勞話: コミュニケーション、良い体験、生活情報)、
- ・自立心の開発: ルールと責任についての(ルールは自分を守るもの....) 講義、危機管理セミナー(海外情勢、海外の日本人情勢) など形成の計画も含む

【実施期間（約4カ月）】

■①語学学習 ②コミュニティアウトリーチ（奉仕活動+文化体験） ③就業経験<BM>

- ①・・・大学付属の語学プログラム（ESL）で英語、中国語、韓国語の授業を受講（週20時間以上）。レベル分けテストによりクラスを決定、学生のレベルと留学先の大学によっては学部の授業を履修する。中国、韓国においては、各語学の授業に加えて英語の授業も履修。
- ②・・・コミュニティアウトリーチ：地域貢献、地域研究を、英語圏の留学地を中心に実施。この課外活動を通して地域の人との関わりや異文化体験を深める。最低15時間の参加必須。（例：支援を必要としている人への物資供給、ホームレスの人々への炊き出し、日本語を学ぶ現地学生への日本語ボランティア、地域清掃等、他数）
- ③・・・就業経験<BM>：アメリカの日本企業もしくは、現地企業で一人一人の責任と国際的市民としての果たすべき責任を体験する。更に、現地の協力を得て、1週間に1回みんな集まり振り返りをし、現状を報告しあうReflection Session がある。

【事後学習（2日間の合宿形式）】

- 逆カルチャーショックのケア、留學生活の振り返り（留學中に最も努力したこと、達成できたこと、難しかったこと）をまとめ、ポスター作成や成果発表プレゼンなど、語学テスト、学習計画の立案・将来のキャリア形成の計画も含む

<検証>

- <LA>現在は特に実施はなし、<BM>TOEIC® Testを前後で受けて英語力の検証

<効果・学生の変化>

- 授業科目『コミュニケーション』『3年生での英語科目』の履修希望者が増加
- メジャー（専攻）『コミュニケーション』希望者が増加
- 外資系企業への就職希望が増加
- まわりの人に関心を持つ学生が増えた

【学内での立ち位置】

- 『国際社会に貢献できる人を育成する』『学びて人に仕える（学而事人）』がモットーであり、留學関係は学内でも重点化されているため、事業を推進しやすい

【プログラム内容と学生の成長との関係性】

- P D C A サイクルの組み込み**。事前プログラムでの目標設定、事後プログラムでの振り返りを通して体験を学びに昇華させ、“楽しかった”で終わらせないようにしている
- 1. <LA> **減単位。現地での英語授業の状況・成績次第とアウトリーチ活動の状況により単位減になる**（出席数・成績“F”・参加または否か）
- 2. <BM> **20単位は、各英語の科目、インターシップ科目、海外ビジネス研修科目と紐付けされており、成績評価(A-F)が付けられる。**レポート、語学学校からの成績を参照する。
- コミュニティアウトリーチを取り入れることにより、人と関わることや学びへのマインドセットにつなげている
- 留學後にメジャー（専攻）登録をさせる段取りとなっており、メジャー専攻の動機づけの役割を果たしている

【危機管理面・体制面】

- 事前プログラムや事後プログラムにおいて危機管理やカルチャーショック対策が準備されている
- 海外拠点（例：桜美林学園アメリカ財団・・・N P O、卒業生ネットワーク）の協力により、現地のコーディネートや何かアドバイスが必要な場合において、リアルタイム対応を可能としている
- （2013年度開始のビジネスマネジメント学群では）1週間に1度参加者が集う共有会の開催、帰国後の情報共有会等を実施し、リスクヘッジやコミュニティづくりに取り組んでいる

【留學希望者を増やす工夫】

- 各学期において学内で『留學フェア』を開催
- 帰国後のプレゼンテーションを広く伝えるために学内で公に行う

【对学生】

- 学生の語学レベル、モチベーション差への対応
- さらなる長期留學希望者を増やすこと（就職活動や金銭面においての不安から留學希望者が増えない）

【対組織】

- 学内においてプログラムに対する理解度を高めること

【対プログラム】

- プログラム検証法の確立

- 現在特に拡大等の計画はないが、桜美林学園アメリカ財団の協力等により現地でのプログラム拡充は可能
- プログラムの検証方法の確立を検討している

<参考資料>

※図1

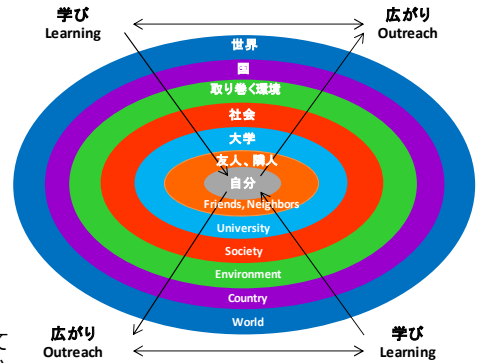
<責任感が身につくプロセス概念図>



この図は、「キリスト教精神に基づく国際人材の育成」を表記のように段階別に分け、提供する側の目標と、また学生の体験がそれぞれの位置にあるのかを確認するための指標となる。

1. 日本文化の再認識 (Reflection on Japanese Culture)
2. 異文化への関心 (Appreciation of Multicultural Societies)
3. 地球社会への参加と社会貢献 (Contribution to Global Community)
4. 責任感の芽生え (Cultivation of Responsibility)
5. 主体性を持つ勇気 (Courage to Lead)

以上が表す項目は、学生一人一人が入っていく環境によって違いがあるため、必ずしも上位が成熟度や発達度を表しているものではない。しかし、このグローバルアウトリーチプログラムで展開される内容に於いては、各段階は学生が彼らの体験の意義を認識する上での難易度を表現しているともいえる



○ 留学をした場合の履修フロー（例） リベラルアーツ学群

		1年次		2年次	
		春学期	秋学期	春学期	秋学期
秋学期派遣	GO	申込み 事前学習	留学 事後学習		
	授業科目等	1年次指定必修科目 英語コア I A、I B		1年次指定必修科目 英語コア II A、II B	メジャー登録
特徴：1年次の秋学期に通常履修する必修科目の一部は、2年次の春学期に自動的に履修するよう、カリキュラムに組み込まれています。また、英語圏に留学する場合、留学でレベルアップさせた語学力を、帰国後に受けるGOプログラム帰国生専用の英語クラスで、さらに磨きをかけることができるというメリットがあります。					
		1年次		2年次	
		春学期	秋学期	春学期	秋学期
春学期派遣	GO		申込み 事前学習	留学 事後学習	
	授業科目等	1年次指定必修科目 英語コア I A、I B		1年次指定必修科目 英語コア II A、II B	メジャー登録
特徴：1年次指定の必修科目の履修を終えてから留学します。英語圏に留学する場合、留学前に2学期かけて英語学習の下積みをし、留学地で更なる磨きをかけることができます。					

履修フロー・写真
出所)桜美林大学 国際交流と留学
Guide to Overseas Study Programs
をもとにベネッセコーポレーション作成



○ 留学をした場合の履修フロー（例） ビジネスマネジメント学群

		1年次		2年次		2年次	
		春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
秋学期派遣	Global Outreach		申込み	事前授業	留学	事後授業	
	授業科目等	1年次指定必修科目 英語コアIAIB		1年次指定必修科目 英語コアIIAIB	専攻科目 ゼミ※1の申込み BMTOEIC IA	留学後に単位認定： 指定の専攻科目 BMTOEIC IB (例)	専攻科目 ゼミ BMTOEIC II B
特徴：まず、1年次に専門的な学びの基礎を固めます。2年次に、より専門的な学びに触れた状態で、留学を通して、ビジネスの現場を見るチャンスを得ます。留学を終了した3年次からは、より具体的になった自分の興味に基づき、専門科目を履修し、ゼミなどで自分の専門性を高め、就職活動に臨めます。							
		1年次		2年次		2年次	
		春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
春学期派遣	Global Outreach			申込み	事前授業	留学	事後授業
	授業科目等	1年次指定必修科目 英語コアIAIB		1年次指定必修科目 英語コアIIAIB	専攻科目 ゼミ※1の申込み BMTOEIC IA	専攻科目 ゼミ開始 BMTOEIC IB	留学後に単位認定： 指定の専攻科目 BMTOEIC II B (例)
特徴：1年次の間に専門的な学びの基礎を固めた後、2年次にはより詳しく専門分野を学びます。2年間で、自分の興味を具体化させた上で、留学をしてビジネスの現場を見るチャンスを得ます。就職活動が本格化する時期には留学を終えますので、留学で培ったノウハウや知識をすぐに活かすことができます。							

Case
3ギャップイヤー・プログラム
(商学部・経済学部・経営学部・コミュニケーション学部)

名古屋商科大学

セメスター制 ・ 学生3,407名

取り
組み
概要

- 【事例タイプ】 海外自主研修（企業見学、ボランティア、学校訪問、調査など）
 【実施主体】 学生支援部門 国際交流担当
 【対象】 1年生、2年生
 【時期・期間】 1年次前期（4月～7月）または2年次前期（4月～7月）
 【行き先等】 ヨーロッパ各国（一部地域を除く）
 【参加人数】 10名～36名（2005年度から2013年度までの実績）
 【単位認定】 2単位～10単位
 【プログラム構成】 事前研修（4-5週間）⇒海外研修（73日間）⇒事後研修（4週間）
 【体制】 ・プログラム担当教員（2名：調査方法・レポート担当教員1名、英語研修担当教員1名）
 ・**学生支援部門国際交流担当**（1名：学生募集、研修運営、教職員・旅行会社との連絡、ツアーウィーク同行等）
 ・**研修先現地駐在職員**（1名：緊急時対応、安全指導、渡航計画指導）

背景
・
経緯

- 【背景】
建学の精神「フロンティア・スピリット」を持つグローバルに活躍できるビジネスパーソン育成という大学のミッションのもと、将来の方向性、学びの目的、自己理解等を深める機会を在学早期に提供するため、名古屋商科大学ではギャップイヤー・プログラムを含め複数のグローバル人材育成教育を行っている。
 【経緯】
 ・1998年 フロンティア・スピリット・プログラム（語学研修+インターンシップ）開始
 ・1999年 国際ボランティアプロジェクト開始
 ・2005年 ギャップイヤー・プログラム（本報告）開始
 ・2012年 海外インターンシップ（アジア）開始
 ＊参考：海外提携校42カ国88校

プ
ロ
グ
ラ
ム
内
容
(目的・
教育
内容・
体制
など)

- 【目的】 自己の発見／国際的な視野の獲得／自律性の向上／心身の鍛錬
 【プログラム内容】 ■募集と審査（12月から3月）
 ・主に入試合格者を対象に告知（5回程度の説明会でのべ参加者100名程度）
 ・30名～40名の応募者から、書類、面接で選考（選考基準：プログラム趣旨の理解度、目的意識、安全意識、健康状態等を総合的に審査し、プログラムにおける学びを十分に享受できるかを多角的に判断）
 ■事前研修（3月下旬から5月上旬の約4～5週間）
 ・研修テーマ、渡航計画策定／安全管理／ヨーロッパ事情／英語学習
 ■海外研修（5月上旬から7月上旬の73日間）
 ・ヨーロッパでのガイドつきツアーウィーク（オリエンテーション・導入研修）
 ・各自が策定した計画に沿ってヨーロッパ各地を単独訪問。テーマに応じて企業、学校訪問、ボランティア、現地調査などを行う。**訪問先との交渉、アポイントメントの取得はすべて学生が行う。**ただし、事前研修中・渡航中に教職員がサポートするケースも多々ある。
 （テーマ例）「車社会のこれから」「自分の夢を見つけるために」「ヨーロッパの老人福祉状況」「外国の方が興味ある日本」
 （渡航例）ロンドン→ブリュッセル→ブリュージュ→アムステルダム→ミラノ→フィレンツェ→ローマ→ナポリ→アムステルダム→パリ
 ■事後研修（7月上旬から8月上旬の4週間）
 ・レポート作成とプレゼンテーション
 ■単位認定
 ・事前事後研修の出席率、事前研修後の英語の試験（50%）、事後のレポート（50%）で評価。
 教養教育科目として2単位～10単位を認定（到達レベルに応じて単位付与）。
 【支援体制】
 ・募集と審査：保護者を含めた説明会を実施（内容：プログラム概要、奨学金、単位認定、サポート体制、選考のステップ）選考応募者は面接資料（海外研修計画案、英作文、アンケート）を作成。
 ・事前研修：研修を行う上で必要な英語トレーニング、テーマ・仮説・活動内容の設定の仕方、旅行会社による渡航案内、現地での移動方法、安全面での注意を実施（4回）。過去に参加した先輩学生との情報交換会（3回）、ヨーロッパ文化に関する講義（2回）を実施、現地駐在員との面談、個々の進捗の確認。
 ・海外研修：24時間の連絡体制、定期報告へのレスポンス、必要があればインターネット電話サービス／電話で相談、危機管理体制の整備
 ・事後研修：帰国後の面談、レポート作成・データのまとめ方に関する講義、プレゼンテーション作成のポイント説明を実施 19

【検証】

プログラム修了後、国際交流担当職員と不定期で面談を実施し、学修への取り組み状況や、研修効果の継続性を確認

【効果・学生の変化】

- ・異文化圏の一人旅であるため、人との関係を広げていくコミュニケーション力が身に付く。
- ・プログラム参加後、留学、大学院進学、授業やゼミを通じたプロジェクト等、様々な機会を積極的に活用する学生が増える。
- ・大学の授業に対する学習姿勢の能動化
- ・将来の社会に対するコミットメント意識の向上

【参加を促す工夫・支援】

■英語力不問の応募条件

厳格な英語力を応募条件に設定しない。面接資料の英作文は面談で用いる材料であり、英作文フォーマット上にも英語力は審査基準でない旨を記述。

■奨学金(給付)

参加者には「往復渡航費」「パリ到着と帰国の際の空港までのバス料金」「海外旅行損害保険加入費」「ユーレイルセレクトパス代」「ユースホステル宿泊費20泊(上限500ユーロ)」「パリ現地研修中の宿泊費」(総額約40万円)を給付。

■インターネットデバイスの提供

情報収集、連絡ツールとして全員に携行できるパソコンを入学時に譲渡、希望者にはポータブルメディアプレーヤーを貸与。

■参加者への単位取得支援

通常の学生は年間40単位を取得するため、参加者には1年次後期の単位取得上限緩和、夏期休暇中のリメディアル科目開講、春期休暇中の集中講義の開講によって年間40単位を取得できるよう支援する。

【学生の成長を促す工夫】

■事前研修での計画策定に時間をかけ、仮説作りを経ての検証(海外研修)という探究的学びの場とする。

計画の詳細化はリスク回避、安全管理において重要。

■計画から研修まで一人で行うことにより課題解決において創意工夫する力、自立への自覚、他者へ感謝する心、精神的な強さを育てる。

■事後の振り返りをレポート、発表により内省させ体験で終わらせない。

【危機回避・安全面】

■計画策定に時間をかけ、現地深夜着などリスクの高い計画をなくし、個々人の旅程を詳細に把握する。海外研修中の計画変更の際には担当教員、国際交流担当、現地駐在職員すべての承認が必要。

■海外研修中は週1回の定期報告をメールで行う。メールは学長含め学内の関係者に広く共有される。

■研修時間に遅れる、期限遵守を怠るなど、リスクの高い学生は事前研修中でも参加を取りやめさせる場合がある。

■事前研修では、過去に実際に起こった事例を用いて危険回避、自己管理意識を向上させる。

■海外研修中は大学職員がパリに駐在し、相談や突発事項に素早く対応できる。

■事故や盗難防止のため、反射ステッカー入りのバックパックを全員に支給。

【プログラム】

検証によるプログラム規模の妥当性判断および参加学生の拡大の場合における、資金面、サポート体制面。

【学生】

プログラム趣旨の理解度が低いなど、エントリー後の選考を通過できない学生の増加。

【研修地域の拡大】

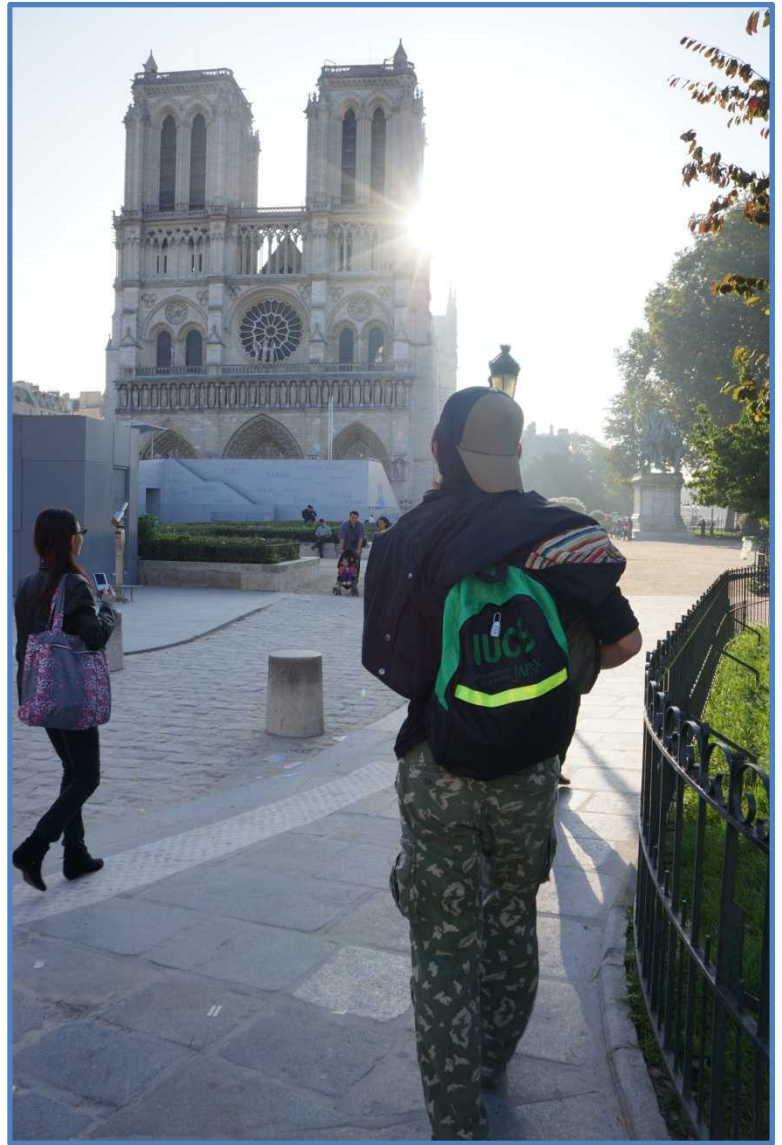
ヨーロッパから世界各国への研修地域の拡大。

【SNSの活用】

SNSを通じた過去の参加学生と派遣学生の連携強化

【サポート体制の拡充】

参加者個々に対する専任アドバイザーの設置(実現可否の検証を開始した段階)



概念図・写真
出所) 名古屋商科大学ギャップイヤープログラム
資料をもとにベネッセコーポレーション作成

Case
4Global Collaborative
University Education – GLUE
(全学部対象)立命館アジア
太平洋大学

クォーター制・5,330人 (対象学生)

取り
組み
概要

【事例タイプ】グローバル協働教育プログラム（入学前教育から大学教養・専門教育まで。語学留学との併用含む）
【実施主体】アカデミックオフィス

GLUEは、「入学前留学プログラム」「グローバル・コミュニケーションプログラム」「Business In Japan」「Gateway Program」「South East Asian Studiesプログラム」と「協働ダブル・ディグリープログラム」からなる。このうち「協働ダブル・ディグリープログラム」は2013年度より開始のため、日本の学生が長期の体験活動を行っている実績を有するのは「グローバル・コミュニケーションプログラム」と「South East Asian Studiesプログラム」となる。以下は両プログラムに言及。

【対象】2年生、3年生（*2年生優先）

【時期・期間】2年次春第二クォーター（グローバル・コミュニケーションプログラム） & 夏休み（South East Asian Studiesプログラム）

【行き先】アメリカ（グローバル・コミュニケーションプログラム） タイ・マレーシア（South East Asian Studiesプログラム）

【参加人数】30名（South East Asian Studiesプログラムはその半数となる）

【単位認定】有（グローバル・コミュニケーションプログラム＝10単位）

【プログラム構成】アメリカのセント・エドワーズ大学＝SEUで教養科目を履修⇒タイ・マレーシアではフィールドワークを展開

背景・
経緯

GLUEは、立命館アジア太平洋大学（APU）と米国のセント・エドワーズ大学（SEU）が、これまでの交流実績をもとに、2011年度からスタートしたグローバル協働教育プログラム。両大学が協働開発した様々な留学・協働学習プログラムを協働で運営している。

APUとSEUは大学の理念や規模等という点だけでなく、国際的な教育を積極的に推進している点でも、大きく共通しており、

2007年より学生・教職員の交流を進展させてきた。APUの次の10年をどうするかと考えた時に、非常に親和性の高いSEUと連携を深め、交換留学だけでなく、さらに学生が成長できるプログラムを協働で開発することを決めた。

【目的】両大学が協働開発をした様々な留学・協働学習プログラムを通して、両大学の学生が共に学び合い、言語能力やコミュニケーション力、異文化理解力を向上させ、グローバル社会に活躍しうる人材として成長することを目的としている。

【内容】GLUEプログラムは大きく5パートに分かれている。

①入学前留学プログラム（APUに入学が決定している学生がSEUへ短期留学、異文化体験及び大学生活準備のスキルを学ぶ 16日間）

②グローバル・コミュニケーションプログラム（APU学生が春semester第二クォーターにSEUへ留学 2カ月間）

③Business In Japan（SEU学生がAPUへ留学し、日本やアジアのビジネスについて学ぶ 1週間）

④Gateway Program（SEU学生がAPUへ留学し、日本語・日本文化中心に学ぶ 2カ月間）

⑤South East Asian Studiesプログラム（APU・SEUの両学生がタイ・マレーシアへ 2～3週間）

<グローバルコミュニケーションプログラム>

SEUとAPUが協働開発する「Communication Arts科目」等10単位の教養科目を履修。これまで身につけた英語力のさらなる向上、また異文化環境で教養科目を学びながらグローバル人材としてのコミュニケーション能力を身につける。受講者の言語基準はTOEFL®500点程度、到達目標をTOEFL®550点相当に設定。

※事前授業としてAPUにて、春第一クォーターに週2コマ、目標設定等の自律学修スキル・英語力、異文化理解の促進等留学前の基盤づくりを行う。

< South East Asian Studies (SEAS)プログラム>

グローバル・コミュニケーションプログラム終了後、アメリカからそのまま半分の学生は、タイ・マレーシアへ向かい、東南アジアの宗教・文化・社会をテーマにSEUの学生及び韓国カトリック大学(CUK)の学生と共にフィールドワークを行う。

日本でもアメリカでもない東南アジアの第3の国において、APU・SEU・CUK学生が協働学習を行うことにより、これまでの学びを飛躍的に高めていくことを目的とするプログラム。3カ国の学生が混合でグループを作り、プログラム全体を通して学んだ東南アジアの宗教・文化・社会についてフィールドワークを行い、プレゼンテーションを行う。

※両プログラム修了後には秋semester期間中に、月一回程度の事後授業を行い、TOEIC®/TOEFL®受験や、次年度の広報、SEU学生がAPUへ留学するプログラム（③&④）において、SEU学生のバディ活動に参加する。

（バディ：両大学の学生がそれぞれ自分の大学に来た学生をサポートしている。）

プログラム
内容（目的・
教育内容・
体制など）

検証・効果

【検証】GLUEのプログラムを通じて、学生が学んだ成果（ラーニング・アウトカムズ）を検証するために、**プログラム毎のラーニング・ゴールを設定し**、eポートフォリオを通じて、個々の学生の言語力、コミュニケーション力、異文化理解力、広い視野と実践力・応用力、批判的・創造的思考力等の到達度を検証している。今後は、eポートフォリオに学生が蓄積している内容にテキストマイニング等の手法を用いた分析を通じて、留学経験の前後に生じる学びや気づきのプロセスを可視化し、プログラム内容の向上に繋げていくことを考えている。また、APUとSEU二大学協働でグローバル教育の効果測定に関してアセスメント開発プロジェクトを進めつつある。

【効果】**参加学生は、TOEFL®の点数も500点を越え、交換留学に参加するようになり、授業への参加態度（プレゼンテーションを率先して行う等）はプログラム後の伸びが顕著に見られている。**

工夫・ポイント

○**全てのプログラムを協働で開発しており、お互いの大学で担当体制を整えている。**APUにプログラム専任の教員が2名おり、プログラムのブラッシュアップ、学生のフォロー等丁寧に行っている。

○**各種プログラムで学んだ教養教育の知識や経験を専門教育への学びへと繋げる「キャップ・ストーン科目」**を両大学共同で遠隔授業などで開講している。

○留学前・期間中・後を通じてのeポートフォリオを活用するにあたり、前年参加した学生をアルバイトで雇い、必要な研修を行った上で、日常のフィードバックは彼らが主に行い、学生（ピア）目線でのアドバイスを行うことで、より学生の不安や共感を重視している。また、教職員の負担軽減にもつながっている。**プログラム修了後もeポートフォリオ上に「GLUEラウンジ」を置き、後輩の相談に先輩が対応する等**、非常に有効な活用をしている。

○**学内に留学のサポートとして「学生留学アドバイザー」や、「言語自主学习センター」があり、学生の留学に向けた学習意欲を高めるために充実した支援体制を構築している。**

課題

○事後学習やキャップ・ストーン科目はあるものの、学部から完全独立のプログラムで、学部の学びとしっかりリンクさせるのが難しい。

○2年生優先にはしているものの、一部3年生が参加するため、ゼミ（演習）への参加が出来ないなど、カリキュラム上の課題がある。（ゼミは帰国後セメスターで再度申請、履修は可能）

○人数をこれ以上増やすのは厳しく、1年生の海外体験プログラムが終わってから2年生後半からの交換留学までのモチベーションを持続させるプログラムの体系化が必要。

○学生の負担を少なくさせる効果測定の方法を考える必要がある。

○今後のサステナビリティについて、学生支援経費や職員の雇用等、補助金による支援が不可欠な部分につき、補助期間終了後の予算確保が大きな課題。

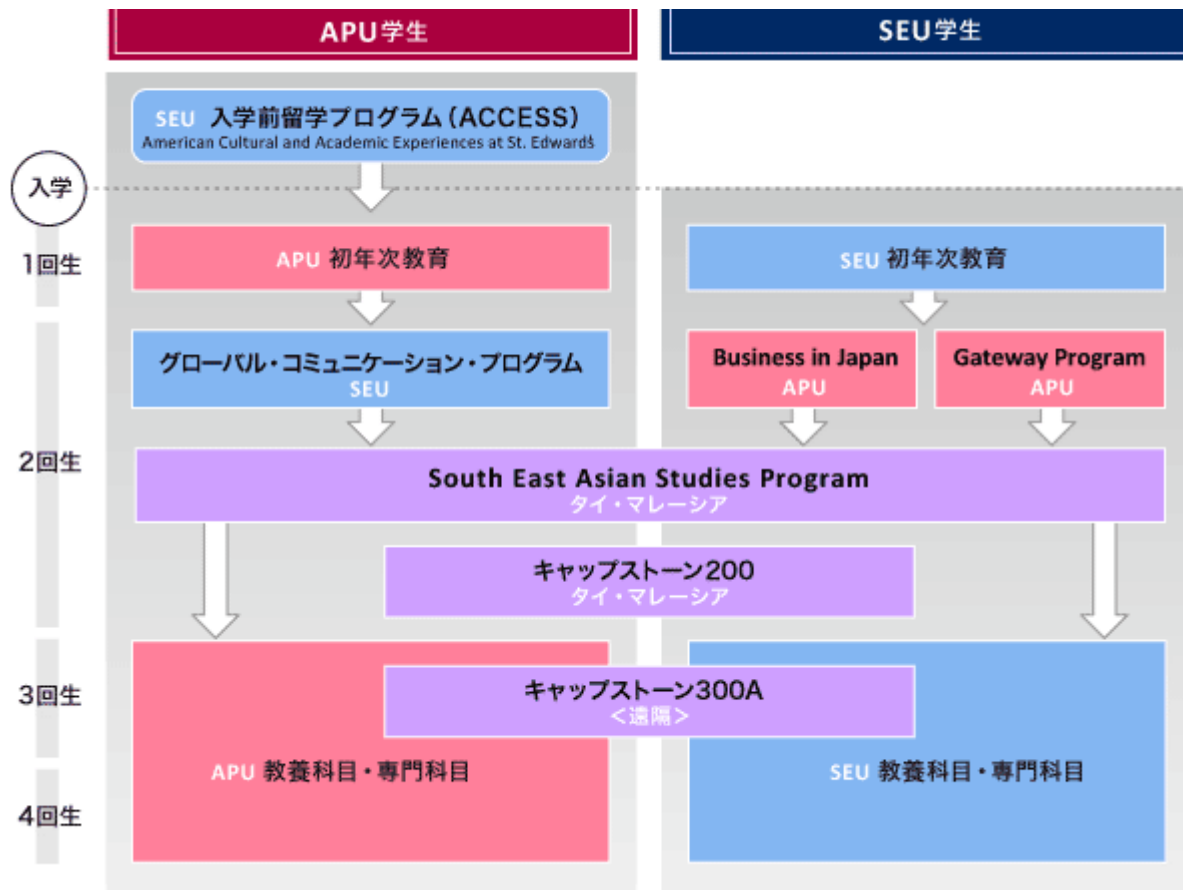
今後の方向性

文部科学省「平成23年度大学の世界展開力強化事業－タイプB：米国大学等との協働教育の創成支援」に採択されており、来年度で補助期間は終了するが、プログラムとしては、継続していく予定。2013年度（平成27年度）からは、「協働ダブル・ディグリープログラム」もスタートさせ、両大学で開講される教養教育と専門教育（社会科学・経営学分野）を体系的に学び、4年間で両大学の学位取得可能であり、両大学はさらに関係性を強めている状況。

また、今後は、キャップ・ストーン科目を含め、プログラム参加者のフォローアップをより強化していき、学部の学びとしっかりリンクさせていきながら、学生の学びと成長に寄与する留学プログラムの充実化に向けたノウハウの共有、情報発信を行いたいと考えている。

GLUE全体概要

GLUEは、(1)積み上げ式協働教養プログラムと(2)協働ダブル・ディグリー・プログラムを大きな柱としています。両プログラム共通で、入学前に実施する「入学前留学プログラム(Access)」、入学後に(1)・(2)のGLUEの各種プログラムで学んだ教養教育の知識や経験を専門教育への学びへと繋げる「キャップストーン科目」の履修があります。また、質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成や学びの質保証を重視し、各プログラムにおいて、ラーニングゴールを設定、それに基づくアウトカム・アセスメントを行い、学生にどのような力がついたのかをeポートフォリオを用いて検証します。



全体概要・写真
出所) 立命館アジア太平洋大学GLUE資料をもとに
ベネッセコーポレーション作成